



## 『誓いの言葉～強さを求めて～』

東京都

代々木警察署少年剣道会

小学5年生 納 富 虎太郎

「本当の強さが欲しい」

その思いを胸にぼくは、小学2年生の時、一人で佐賀へ剣道留学をした。試合ではメダルが取れるくらいの実力があったので、佐賀では試合で勝つための色々な技を教えてもらい、もっと強くなるんだと決心して、佐賀にのりこんだ。防具をつけて稽古をしていると、突然、佐賀のお父さんから「虎太郎、防具を全部とれ。」

「えっ。」ぼくは何を言われたか分からず、もじもじしていると、

「今日からは、防具をつけずに足さばきの稽古をやれ。」

ぼくは、「なぜ？足さばきを教えてもらうために、わざわざ東京から来たんじゃない。」

と、悔しい気持ちでいっぱいだった。一緒に留学した友達が防具を着けていく中、ぼく一人だけが毎日足さばきと素振りだった。自分がみじめで、楽しかったはずの剣道が嫌になった。東京に帰りたかった。それでもぼくは、足さばきと素振りだけをひたすらし続けた。

2月に校内大会があった。ぼくは基本試合に出場した。基本試合は所作、基本打ちの正しさ、美しさと決まる。ぼくは、春から取り組んだ成果が出て、優勝した。先生は、「虎太郎、ずっと基本ばかりでつらい思いをしたらうけど、よく我慢したな。基本がしっかりしていれば、技はいつでも覚えられるから。」と言ってくれた。先生の言葉に胸が熱くなった。

しかし、佐賀のお父さんは「虎太郎は心が弱い。心を強くしないと勝てなくなるぞ。」と言った。ぼくは、「はい。」と元気よく返事したものの、その時はまだ十分に意味を理解できていなかった。

東京に帰って色々な試合に出た。勝ちたい気持ちは強かったが、なかなか思うように勝てなかった。勝てないとプレッシャーを感じ逃げ出したくなる。試合が嫌になることもあった。今思えば、ぼくには心の強さが足りなかったのかもしれない。

4年の秋の団体戦、チームは決勝進出を果たしたものの、ぼくは負け続けていた。決勝戦でのぼくの相手は一学年上。個人戦でも準優勝していた。また弱気の虫が出てきて試合から逃げ出したくなったぼくを、道場のみんなは「虎太郎なら勝てるから、自信持って。」と励ましてくれた。試合が始まり、ぼくは無我夢中で戦った。今だ！と思った瞬間、ぼくは無心で相手の面に飛び込んでいた。それは佐賀で何度もやった「基本の面打ち」の動きだったと思う。ぼくは面二本を決めて勝ち、チームの優勝にも貢献できた。先生からは、「虎太郎の最後の面は、今までと違って迷いのない、最高の面だったぞ。」とほめてくれた。自分のためではなく、チームのために無心で打った面が、ぼくの弱気の虫を追い払ったのだ。

ぼくが欲しかった「本当の強さ」とは、試合に勝つための技ではなかった。それは、佐賀で教えてもらった基本技術と、それを忍耐強く続けることのできる心の強さ、そしてその心の強さを支えてくれる仲間が存在だと、今は信じている。

団体戦の金メダルは、今、ぼくの手元にはない。学校で作った20才まで開けられない「思い出の缶詰」に閉じ込めたからだ。ぼくが20才になってこれを開けるときには、試合に勝つことだけにこだわった心の弱い自分ではなく、「本当の強さ」を見失わずに、剣道を続けている自分であることをここに誓う。